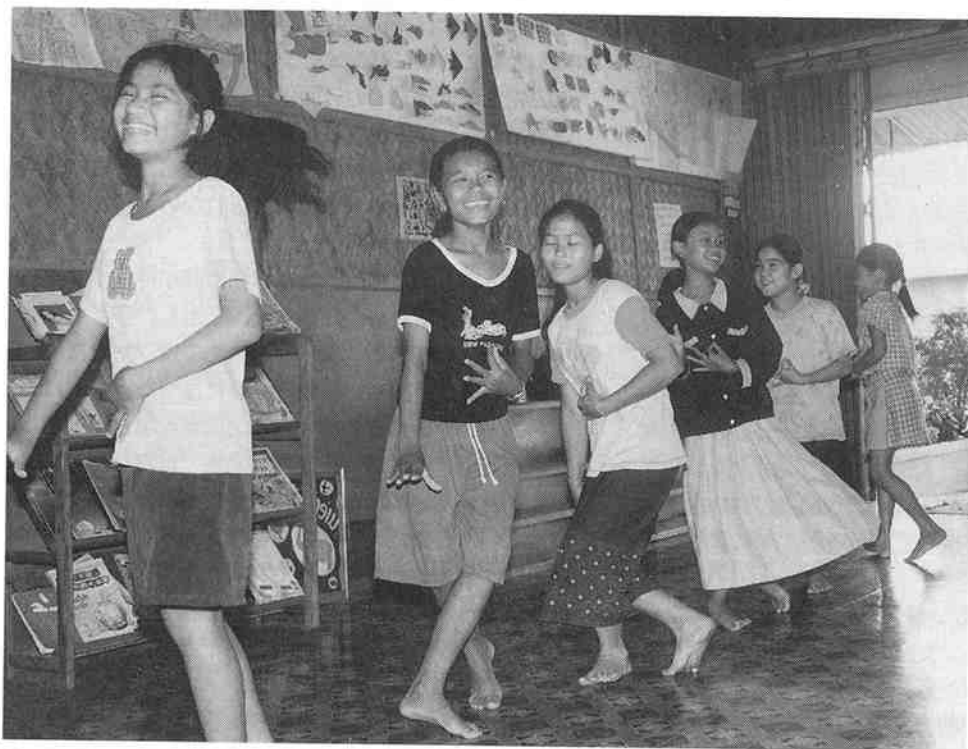


ラオスの子ども通信 10号

(1997年11月発行)



女の子たちは踊りが好き。友だち同士で練習する。ヴィエンチャンの事務所にある「子ども文庫」にて。



ヴィエンチャン子ども文庫の日々

今年6月、ヴィエンチャン事務所に約1か月滞在しました。現地の様子を報告します。

森 透

■文庫のスタッフと子どもたち

スタッフのバンオンが子どもたちに絵本を読み聞かせている。トラックが、ときどき彼女の声をさえぎる。子どもたちは平気な顔をしている。慣れっこになっているのか、話に熱中しているのか。

事務所の前は大通り。左に行けば、歩いてすぐ町の中心に、右に行けば車で15分ほどのところに飛行場がある。最近では交通量が増え、事務所の前をトラックがうるさく通っていく。

私は、1か月間毎日、事務所周辺のソバ屋に1軒1軒片っ端から入り、食べてみた。1杯の値段はどれも1,000~1,200キップ(約US\$1. 6月時点)。あるとき、CCC(子ども文化センター)のあたりで食べたソバは何と500キップだった。こんなに値段が違うの

か。事務所あたりが町の中心の一部ということの意味するのか。まあヴィエンチャン中をしらみつぶしに食べ歩いたわけではないので、わからないが。

事務所は、1階が子ども文庫。その奥に流しと電気コンロの簡単な炊事場、そして倉庫がある。

文庫の蔵書は、会で出版した本、日本で集めた日本語の絵本にラオス語訳を貼り付けた本、タイで買ってきたタイ語の本などからなる。タイ語を読める子も中にはいる。タイ語の本は、絵本はスタッフがラオス語に訳し、ワープロ入力し、プリントアウトしたものを貼り付ける。図鑑までは訳せないでそのまま。

6月は小学校はもう夏休みで、中学高校は試験期間。文庫には子どもたちが1日に25人くらいやってくる。本を読む子のほかに、絵を描く子、折り紙をする子と、

いろいろ。紙芝居をするときは、小さい子が絵を抜く役をやり、大きい子が読んであげている。女の子たちは踊りの練習も好きだ。ふらっと2~3人連れでやってきて、だらっとおしゃべりだけして帰る子もいる。毎日という常連もいる。常連はコンロでインスタントラーメンをつくって食べている。われわれスタッフの昼食は、文庫の店番をしながら、近所の市場で買って来たおかずとご飯(もち米)を食べる。ご飯が足りなくなると常連組が買いに走ってくれる。

新しい子たちが入り口から中をのぞきこんでいる。「入っておいで」と手招きすると、手に持った紙を差し出しながら入ってくる。それは、こども文庫入会のための用紙で、親が記入したもの。住所や親の名前、職業などが書かれている。入会者はすでに1,300人。この書類の整理は高校生が手伝ってくれている。

文庫は、子どもたちの自由な空間なのである。バンオーンと、もう一人のスタッフであるカオの息もピッタリ合っている。この2人の20代前半の女性が子どもたちに愛情をもって接しているのが、なによりの文庫のよさだと思う。

とはいえ、文庫はハッピーなことばかりではない。ときどき盗難がある。文庫の記録用のカメラが盗られたり。ヴィエンチャンも、だんだんのんきにしていられなくなっている。巷ではバイクの盗難が増えている。地元の新聞でもバイク窃盗団の若者たちが捕まったニュースが大きな写真入りで載っていた。

■CCCのスタッフを巻き込んで

一方、ヴィエンチャンのCCC(子ども文化センター)は、スタッフの士気が上がり、私たちの悩みの種になっている。CCCには情報文化省の兼任のマネジメント・スタッフ以外には、子どもの相手をするのは若い女性の専任スタッフが1名いるのみ。これまでも、たびたび彼女のやる気を出させようとしかけてきたが、なかなかうまくいかなかった。会の文庫のように仲間がいないのが、盛り上がらない理由のようだ。

対策として、CCCの若い女性スタッフをときどき、会のこども文庫に呼び、一緒に活動してもらうことにした。これを実行したのは私の帰国後だが、現地からの報告によれば、子どもたちと楽しそうに活動しているという、ひとまずは、やれやれというところだ。

■学校を訪問する

事務スタッフのボケオと2人で小学校の視察に行った。事務所から約2時間のヴィエンチャン郊外だ。ハックアン(学校図書室)として会に支援をして欲しいというのだ。ボケオはこの学校は熱心だから支援したい、という。訪れてみると、すでにいくつかの団体から図書が寄贈されている。ただ、十分利用されているか

という、そういう様子にも見られなかった。先生が読み聞かせをよくやっていたら、子どもも本になじむのだが。そこで、ボケオに「バンオーンにこの学校で読み聞かせをしてもらおうか」と言ってみた。すると、「読み聞かせは、読み手と聞き手の関係づくりがいちばん大事。たまにバンオーンがゲストで来るより、ここの先生が子どもといい関係をつくらなくては」との返事だった。視察後、校長先生宅で昼食をいただく。家に帰れば校長先生は農家のおかあさん。日本の教員を頭に描いてはラオスの学校は語れないと感じた。

■人が育つ、人を育てる

文庫という場で私は、滞在当初は間が持たず、何かしなければと落ち着かなかった。しかし、子どもの相手をまめにしているスタッフを眺めては、ただぼーっとしているだけでもいられるようになった。これは、女将さんがくるくと働き、親父は客とおしゃべりしているアジアの食堂の典型的な光景ではないか。

私が言いたいのは、文庫を通してスタッフが育ってきたということだ。事務のお手伝いだったバンオーンが、読み聞かせのお姉さんとして文庫になくはならない存在となったこと。現在、掃除や雑務をしているカオもバンオーンを見ながら紙芝居を子どもたちにやってあげていること。会計とパソコン・オペレーターとして入った事務のボケオが、学校を視察し、バンオーンの読み聞かせを見ながら、子どものために何をしなければならぬかを考えていくようになっていく。

これまでの私たちの活動の成果は、彼らの成長そのものに見てとることができるし、また東京の使命は、このような意欲を持ったヴィエンチャンの人材を成長させていくことにある。そんなことを痛感した、1カ月の滞在だった。

「絵はがきセット」 新作できました。

どうぞ、ご利用ください。

◆「ラオスの織物」6枚組 500円

(送料は、1セット90円 3セットまで190円)

撮影はカメラマンの普後均さんにお願ひしました。



いままでのセットもあります。ご利用ください。

◆「ラオスの風景」5枚組 400円

(送料は、2セットまで90円 5セット190円)

メコンを渡って、サバイディ

スタディツアーの10日間

編集部

■体当たりホームステイ。笑い、戸惑い、涙。

8月1日から10日にかけて、スタディツアーを実施しました。これまで、チャンタソンが知り合いの人々を案内するツアーは何回も行われてきましたが、会が主催し、広く一般の参加者を募っての企画は今回が初めてでした。総勢23名。高校3年生から大学生、社会人、年齢も10代から60代まで、海外は初めてという人もいれば、アジアを歩き慣れた人もいて、さまざまな人々が集まりました。

参加の動機は、「人々の生活にじかに触れたくて」「国際ボランティアに興味があって」「孤児院などを見学したくて」「名前も初めて聞くラオスというところに行ってみたくて」「メコン川を見たくて」「ラオス語の練習のために」「ふだんは一人旅が好きだけど一人では訪問や体験のできないことができるので」など、各人各様といったところ。

目玉企画は、2泊3日のホームステイ。社会主義政権の国でのホームステイはなかなか難しいものがあったのですが。

ステイ先は、会が支援するCCCのあるボリカムサイ県のパクサンという小さな町。CCCに図書室を新築し、そのオープン式典に合わせて行われました。この図書室は、株式会社ミクプランニングの支援によって建てられ、その社員の方、2人もツアーに参加しました。ホームステイは、ツアー参加者1、2名が1軒の家におじゃまする形で行われました。ステイ先の子どもたちと川で遊んだり、絵を描いたり、家族そろって筍とりにいたり、いっしょに食事をつくったり。

どの家からも暖かく迎えていただきました。参加者は「まったく言葉が通じなくても、すごく楽しく過ごせた」「何を食べてもおいしくて」と感想を語っていました。そして別れの場面では、送る側も送られる側も、涙、涙。

とはいえ、日本の生活とはさまざまな違いがあり、戸惑ったり、体調を崩してしまう参加者もありました。「庭のトイレに困った」「水を浴びるお風呂がなかった」「お米（いわゆるタイ米）のにおいが苦手だった。でも、勧められるので食べた」など、など。

古都ルアンパバンでは、孤児院を訪問。サッカー、綱引き、だるまさんがころんだ、おもちゃづくりをしたり、機織りやラオス語を教わったり、大きな木の木陰にゴザを敷いてもらって昼寝をしたり。日が落ちて



からはキャンプ・ファイヤー。歌と踊りをお互いに披露し合いました。

■そして、ツアーの成果は？

主催者として、スタディツアーを実施した趣旨は、ラオスと会の活動を知ってもらいたい、ということでした。ツアー後も活動に参加してもらえればということなところですが、そうでなくても、その人がその後の人生を考える上で、何かプラスになればそれで十分とも思ったのです。ツアーには会からは、チャンタソンと森が参加しました。東京事務所スタッフによるツアーの準備作業は不馴れなこともあって、てんでこ舞いしたこともありましたが、そもそもスタディツアーでどんな成果が期待できるのかもわからなかったのですが、終わってみていちばん強く思うのは、参加者のみんなとすてきな仲間になれたなということです。会としてはラオス・ファンが増えたのが成果といえるでしょう。秋に行われたイベントなどで協力してくれたのは事務局としては、ありがたいことです（これからもよろしくね）。

現在、スタディツアーの報告とラオス紹介を兼ねて1冊にまとめようと、東京のツアー参加者で編集作業に取りかかっています。ラオス語会話集づくりの話も出ています。また、八丈島から参加した仲間は写真を撮影するために、発表する準備を進めています。唯一の関西から参加した仲間は、地元でラオス語の勉強をはじめました。日本の中で、その人なりの感性で活動がはじまって、「ラオス」というだけでなく、いろいろな関心や切り口でネットワークキングしていけたらと思うと、なんだか、とてもわくわくしてしまうのです。

ラオスの子どもの現状と NGOに期待していること

ドゥアンドゥアン ブンヤヴォン

ASPBの現地出版コーディネーターのドゥアンドゥアンさんが来日。ラオスの現状のなかで、活動をどう評価したらいいのか、10月12日に行った日曜勉強会で話してもらいました。

ドゥアンドゥアンさんは、ASPBの支援によって発行された「絵とき辞書」の編集や作家活動を行うほか、織物についても造詣が深く、今回は横浜シルクセンターで開催されたラオス織物展のため、来日しました。

■ラオスの子どもの実態

人口400万ほどのラオスに、大きく4つの文化的・言語的に異なる民族が存在します。そのなかで、標準語のラオス語を話す人たちが教育を受けるのは容易です。メコン流域に住んでいるラオルン族(低地ラオス人)には、家庭の経済状態に応じて教育を受ける機会があります。とはいえ、低地ラオス人は人口の55%に過ぎません。残りの民族は山間部などに分散して住んでいるので、教育を受ける機会も少ないのです。

ラオス人口の40%近くを占める少数民族のうち、農村部に住んでいる子どもの50%以上は、教育を受ける機会がありません。とくに女子の就学率は3%しかないところもあります。

ラオスの義務教育は5年間で、無償です。ヴィエンチャン市内には私立の学校もあり、裕福な家庭はそこに子どもを通わせることもあります。一方、農村部では、公立学校があっても、子どもを通わせない親がたくさんいます。その理由はいろいろですが、とくに女の子の場合は、労働力として必要とされる事情があります。学校に行っていない子どもたちの中には、家族から離れて、シンナーや麻薬におぼれたり、だまされて売られていくケースがあります。その割合は非常に高く、サワナケットで調査したところでは、18才以下の子どもが村に残っている割合は20%にも達しません。ほとんどの子どもは、タイのほうに労働力として「輸出」されているのです。

ラオスの子どもたちが学校を離れてしまう理由には、先生の質が低く、教育に対して積極的でないこと、十分な教材がないことなど、さまざまな問題があります。なかでも大きいのは、学校に魅力がない、彼らを学校につなぎとめる活動があまりないことだと思います。とくに勉強以外の、ス

ポーツや音楽といった活動に接する機会がありません。ラオスの子どもにとって、いきいきと楽しく過ごせる場は、ほんとうに少ないのです。

街の子どもの場合、両親が共働きで子どもの面倒をあまり見られず、家族の絆が薄れてきているという問題があります。一方、農村部の子どもは、親の手伝いがあるために、遊ぶことができません。これが、一般的なラオスの子どもたちの状況です。

■CCCについて

ASPBがヴィエンチャンにCCCを設置し、運営を応援し始めて、今年で4年目になります。今では、ラオス政府が私たちの活動を理解し、国家計画として全国的に広げたいと考えるようになってきました。

設立当初から参加していた子どもが、現在14~15才になって、ボランティアとしてCCCに戻ってきて、手伝ってくれています。活動の中から、それを継承していく人が生まれる。そういう意味では、CCCの活動は成功していると言えるのではないかと思います。

ASPBは、CCCの中にも図書室を設けています。CCCの活動の中で、読書推進運動に結びつくような他の活動も、同時に行っています。

■ラオスにおけるNGOの役割と活動

現在ラオスには30くらいのNGOが活動しており、ASPBもその中の一つです。大部分が2~5年のプロジェクトで、いちばん多いのは、農村開発、生活改善といった分野の活動です。収入の向上を目標に、農業、技術、家畜、工芸などの研修を行っています。

その他に、衛生と健康、教育に関して活動するNGOもあります。子どものことを中心にやって

いる団体もありますが、精神的なものではなく、子どもを取り巻く外的な問題に取り組んでいるようです。心理や情緒に関して活動している団体は少ないのです。

NGOのプロジェクトを評価するのは難しいことです。ASPBIについても、図書館を何冊作った、本を何冊作った、といった評価は簡単かもしれませんが、正しい方法ではないと思います。私たちが評価したいのは、子どもたちが幸せであるかどうかということ、そして、自分たちが夢や希望を持っているかどうかということです。

私たちの課題は、本気で子どもとつきあい、よく理解してくれるスタッフの育成です。これは難しい問題です。私たちだけでなく他のNGOも頭を抱えています。いろいろなNGOが村人と活動しているけれども、プロジェクトが終わると同時に、その活動も消えてしまうことが多いからです。

しかし、私たちは、子どもたちの中に何かを残し、広げていってくれるのでは、という期待もっています。全国の子どもの問題を解決することはできませんが、一部の問題を少しでも解決できれば、それが希望となっていくのではないかと思います。私たちが希望をもって子どもと接すれば、その子たちが将来ラオスのためにもいい働きをしてくれるのではないかな、という気になるのです。

■これからの活動の方向について

ASPBIの募金で、すべての子どもに行き渡る数の本を印刷することはできません。出版できる本数は少なくとも、その本でどうやって効果を上げるか考え、戦略を改善していかないといけないと思います。

また、資金を集める方法についても、もっと考える必要があります。たとえば、今、街の人たちは生活の余裕ができて、子どものためにお金を使うことができます。教育に必要だと理解する親は、きっと私たちの本も買ってくれるでしょう。

私たちは長い間、無料で本を配布してきましたが、これからは変えていってもいいのではないかなと思います。少数でも魅力的な本を作って売るとか、貸本のような方法などもあると思います。いろんな人から意見をきいて、みんなで考え、フレキシブルに取り組んでいきたいと思っています。

■質疑応答

Q：親は、子どもの情操教育への理解や、子

ものの幸せといった価値観を持っているのか。

A：農村の親は、勉強しなくても田んぼの仕事はできると考え、教育が自分たちの生活をよくしていくということを理解していない。

街の親は田んぼがないので、出世して安定した生活をするために、子どもに勉強させたいと思う。

教育の機会があっても、内容が実際の生活に役に立たないから理解してもらえない。したがって、子どもが学校以外で楽しく過ごす、情操教育といった考えは全然もっていないのが現状。私たちが図書館を持って各地に行くときは、親もいっしょに集めて説明したり、読み聞かせの実演をしたりしている。

私は、教育の内容はもっと子どもたちの実態に近づき、生活に役立つものになってほしいと思う。生活に反映すれば、親も必要性を感じて、子どもを学校に通わせるようになると思う。

Q：どういう人が先生になるのか。教員養成のシステムはどうなっているのか。

A：初等教育がラオスでは、重要視されておらず、小学校の先生には、学力のあまり高くない女の先生が充てられることが多い。出産しても保育所が少ないうえ2才からしか受け入れないので、子どもをおぶって授業をする先生もいる。小学校の先生の給料は街でも農村でも同じだが、農村は田畑があるので食べていける。街では休み時間に菓子や惣菜を売るなどして生活の足しにする先生もいる。4年前、文部省に対し、先生の生活を改善しなければ、ラオスの教育の質も向上しない、という報告をした。今年、政府は先生の生活を改善する方策をはじめた。

Q：街の子どもが非行に走る原因は？

A：ラオスが社会主義だった頃は鎖国状態で、タイと関係も希薄だった。1990年に開国してから、いろいろな商品が流入しはじめ、一部の難民が外国から帰国してきた。同時に、シンナーなどの問題も持ち帰った。シンナーを吸引する習慣は急速に広がった。小学校から高校まで、男の子の間でシンナー遊びが多い。理由は、親が子どもの面倒を見ないからとか、有害であることを知らないからとか、いろいろ言う人がいる。地方の、とくに少数民族の子どもは、オピウム（阿片）を吸うという問題がある。ラオスは阿片を生産する国として有名でもある。親にならって阿片を吸う子もいる。

問題が大きいのは街の子。すぐ学校をやめてしまったり、窃盗などをして、警察に捕まるケースもある。ラオスでは子どもに関する法律の整備もなく、子どもの問題を扱う弁護士や施設もないために、不当に扱われている現状がある。とくにタイへ労働力として出ていった子どもたちがこういう問題をもって帰国している。子供たちをただ刑務所に入れておくのではなく、精神的な面も含めたケアが必要ではないか。親たちも、シンナーによって子供にどんな悪影響があるのか、また将来がなくなることについて全く理解していない。先生や親にも教育する必要がある。CCCでは、こういった子どもたちに自分の経験をCCCの子たちに話してもらうという取り組みをしている。

Q：田舎の子どもに、もし教育の機会が与えられたら、本人の勉強したいという意欲はどれくらいあるのか。

A：親が力ギを握っている。いままで田舎の人たちは教育を受けてこなかった。社会が変わって、子供に教育を受けさせなければいけないということもわからない。だからまず家族に理解してもらわなければならない。

Q：ラオスへの援助のうちNGOは4%未満（金額ベース）。政府はより額の大きな団体に顔を向けていくと思うが、NGOへの期待は？

A：私の意見としては、政府や国際機関の援助とNGOの援助、両方とも必要だと思う。NGOの援助は、少ないけれど直接ラオスの国民に届いている。また、迅速である。また国民が直接援助を受け取って、自分たちで運営するという場合が多い。ところが、大きい額の借款などは遅くてなかなか成果が見えない場合がある。ラオス政府は、長期間の問題解決のためにお金を借りているようだ。しかし、NGOの場合は、狭い範囲で活動し、成功すれば自然に波及効果が現れる。小さいNGOと、大きいNGO、またはUNDPのような国際機関など、それぞれ長所、短所がある。私としては、小さいNGOがたくさんあって、村で直接活動してくれることを望む。地元から、底辺からだんだんと活動して行って、最後に政府の活動と一緒になればいいのではないか。

Q：ASPBは、効果があるのか。日本にいと効果が見えにくい。ラオス人にとって、NGOの活動によって効果があったというのは、どういうことか。

A：私の経験からいうと、いろんなNGOと仕事をしてきたが、いちばん速く、長く、仕事をしているのはこのASPBだけ。なぜ長くやっているかというと、効果が長く残るからだと思う。15年間やって、全然発展していないように見えるけれど、木を植えるのと同じことではないか。私はとても効果があると思う。たとえば、本を持って田舎の先生たちを訪ねるとみんなとても喜んでくれます。去年、3か所に本を持っていったが、みんな恩を感じてくれた。

このまえ先生たちを集めてセミナーをやったが、これまでは日当か食事が付かなければ1日いっしょにセミナーをやることなど考えられなかった。しかし彼らは私たちとセミナーをやってくれた。たぶん、かれらも興味を持つようになってきたのだと思う。彼らが興味を持ってくれたということは、私たちの成功ではないか。

Q：私たちASPBはこの5年くらいで23万冊の本を作った。ただ、国立図書館長のコンドゥアンさんの話では、昨年ラオスで作られた子どもの図書は5種類くらいしかない。そのうちの3~4冊がASPBのものだという。活動の中で、ラオス人の自発性を啓発できる成果をもたらしているのかが気になる。ラオスの人たちが自発的に本を出すという状態は、まだ見えてこない。私たちのやり方に問題があるからなのか。

A：たしかに子どもの本はあんまりない。ユニセフが2冊、ラオス愛国戦線が2冊、他にESF(国境なき教育団)もある。直接配るので国立図書館まで届けないのかもしれない。実際、国立図書館に寄贈していない団体もある。オーストラリアの赤十字がエイズや麻薬の問題で子ども向けの本を作っても、図書館に届けない場合もある。正確な数の把握は難しい。地方で、ルアンパバンやサワナケットで、ラオス人で自費出版する人も増えてきている。

いちばんの効果だと思うのは、政府が出版社の設立を許可しようとしていること。ユニセフでも、政府との協議の中で、教科書以外にも副読本を作る予算が必要だということが話合われている。たぶん、これらの成果は、ASPBの刺激で生まれたものだと思う。私たちが作ったカラーのきれいな3冊の絵本を文部省に持っていったら、とても喜んで、ぜひとも文部省で再刷したいといっている。いい効果が現れたと思う。

さて、これからどうする？

お金がない、人も足りない。会は、ないない状態のただ中にあります。
ラオスの子どもたちへの支援を、どうやって生き残らせていくか、模索の真っ最中です。

編集部

■会と活動の今後を考えるために

「A.S.P.B.ラオスの子供に絵本を送る会」という名前は、詐欺でないの？ という話が最近時々出てきます。というのも、現在、会では東京から絵本をそれほどラオスに送っていないからです。会が活動を始めて15年。活動内容も別表の「活動のあゆみ」でわかるように、随分と変わってきました。

当初「もの」を送る運動であった活動も、現在は、ラオス現地でラオス語図書をつくること、その本を全国の小中学校に配ること、本の書き手、読み手を育てること、さらに、児童館である子ども文化センターの運営支援、学校図書室の整備運営支援など、人材の育成を主眼とした多方面の分野で活動を行うようになっていきました。そしてこれらの活動の多くは、この4～5年に骨格が形成され、急速に展開してきたものです。この3年間の会の収支を見ると、急激に活動が拡大していることがよくわかります。これにはラオスの子どもたちの教育環境が、他アジア地域に比べても、なかなか改善されていかないという現況を背景に、現地からの会に対する要望、期待、さらにそれに対応する本当に多くの方による支援、資金提供、また郵政省国際ボランティア貯金などの政府系資金、さまざまな財団、

民間会社からのご支援などが、かみ合い、初めて可能であったことでした。

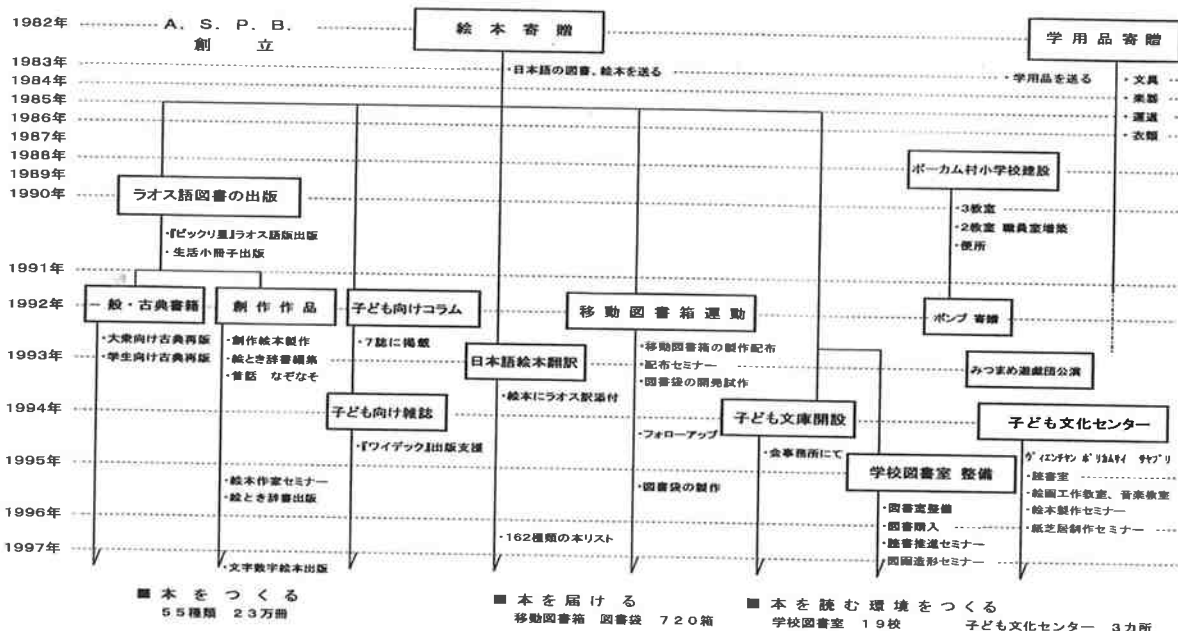
しかし、このところ、日常活動の行き詰まりとでもいような気配が、少々感じられています。活動の中心メンバーになんとはなしに、疲労感がたまってきている感じがするのです。そこで、少しでも元気を取り戻そうとの意図から、9月15日、会の活動を少し振り返り、今後のことを考えてみようという会合が、一日かけて開かれました。

会の歴史を振り返る中、日本の本や文具、衣類などのものを送る活動から、現地でラオス語の本を創る活動へ、さらに人を育てる活動へと展開、変化してきたことは、方向性として正しかった、との一致した評価がなされたものの、各プロジェクトのバランスはこれでよいのかということが議論となりました。

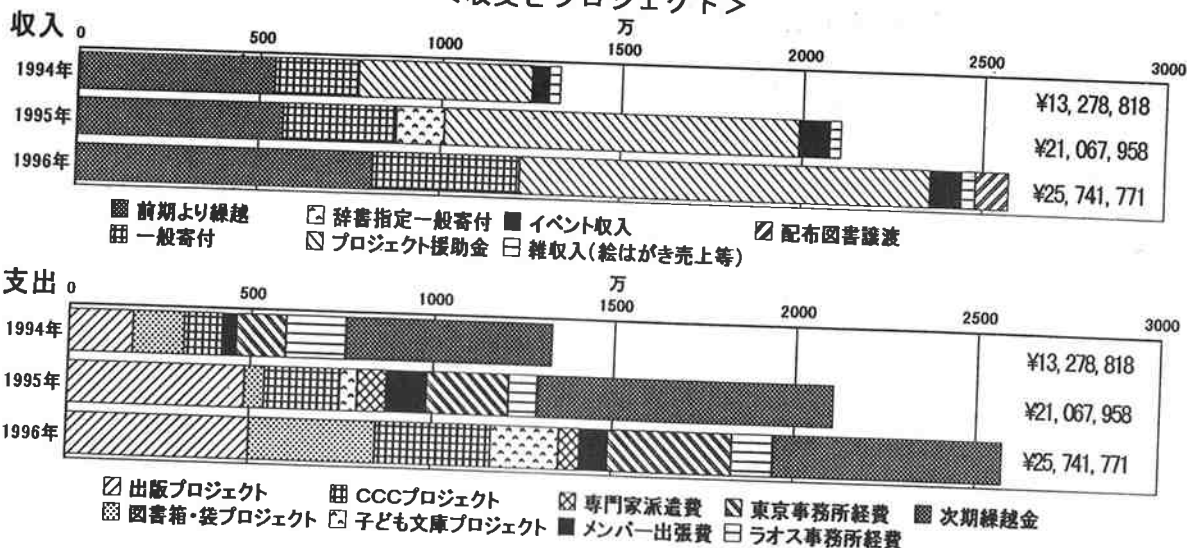
特に、出版の点数がこのところ減少していること(冊数は増えている)。「子ども文化センター」のウエイが大きくなりすぎていないかが、問題点として上げられました。

限られた我々の能力では、いかに効率よく、無駄なくプロジェクトを組み立てるかが、大変重要です。プロジェクトの優先順位を決めるためには、活動の原点

<活動のあゆみ>



＜収支とプロジェクト＞



を常に思い起こす必要があります。

■出版プロジェクトは、活動の原点

出版プロジェクトが、点数から見ると若干低調と感ぜられるのは、ひとえに資金手当ができないためです。とりわけ近年の会のオリジナルな企画のものは、質を重視したため、ページが厚く、印刷冊数が多いなど、お金がかかる要素がそろっています。95年に出版した「絵とき辞書」はこれまでに3版10,500冊の出版を終えましたが、全国の学校からの要望が強く、まだ6,000冊ほどは改訂版として増刷したいと思っています。そのためには配布費用も含め450万円ほど費用がかかります(先日、毎日新聞が辞書の記事を掲載して下さり、40万円ほどのご寄付をいただきました)。また今年の1月に5,000セット出版し、「これまでラオスで出された子ども用の図書として一番質が高い」との評価を得た「文字数字絵本」3分冊についても、増刷の他、未だ収録されていない文字についての新しい分冊を続けて編集出版する必要があります。さらに現地からは、1タイトル30万円ほどの出版要請がいくつか来ています。非常に子ども用図書の出版件数の少ないラオスでは、定期的に出版を手がけている団体は極めて少なく、我々の継続的な活動の役割は非常に重いものがあります。

会の活動の原点である、「文字文化に触れる喜びを子どもたちに伝えよう」という主旨からも、出版支援の活動はもっと積極的に行わねばならないのですが、質を追求すると、時間がかかり、どうしても種類が減ってしまいます。この辺りのジレンマを抱えながらも、もう少し積極的に出版プロジェクトを進めようと合意されました。そこで、このようにある程度まとまった

費用が必要な出版プロジェクトの展開には、積極的な企業、個人に対する呼びかけが不可欠であり、何とかキャンペーンを展開していくことになりました。

■子ども文化センター。思惑のズレ

この1年ほど私たちの頭痛の種であった、「子ども文化センター」の成果についても、話し合われました。なによりも皆が感じていることは、「子ども文化センター」はやたらに手間がかかるプロジェクトだ、そしてどうも私たちが望んだ方向と違う方へ進んでいるのではないか、ということです。

そもそもこの活動は、ラオスの学校ではほとんど行われていない、図画工作、音楽、読書、演劇など子どもたちの情操を高める教育施設をつくりたいということで設立されたものです。「読み書き算盤」が中心の公教育では、受け身の暗記が中心であり、子どもたちが、自分の考えを積極的に表現する教育というのはなされていません。そのこともあり、学校が面白くないと感じる子どもも多く、就学率の低さにも影響を与えています。そこで、子どもたちが様々な「楽しさ」を感じる場を創りたいと考えたのです。しかし、このプロジェクトは政府情報文化省の管轄で、スタッフはすべて派遣されてきた役人です。そのためか、こちら側の意図がなかなか十分に伝わりません。

私たちは設立当初、どんな子どもでも分け隔てなく「遊び」にこれるような施設にしたいと考えていました。しかし「子ども文化センター」はラオスの社会では、まだまだ特殊な場で、このような活動に興味を持つ親は、一部の階層に限られ、また生活の余裕がないと通わせることができない、という現実が見えてきました。こぎれいに民族衣装をまとった子どもたちが伝統舞踊

を演じている様子を、窓に肘をのせ、鼻たらしの子どもたちが凝視しているのを見るのは、なんとも居心地の悪いものです。私たちの持っていた町の児童館というイメージより、一部の子どもたちが通うお稽古ごと教室に変わってきています。

しかし、社会の指導的な立場の親が、活動を理解してくれるからセンターの活動も積極的になってきたという側面も見逃すことができません。さらに、それでも子どもが楽しさを感じて育ち、次第に広がりを持つことが出来るのなら、そんなに悪いことではないだろうという意見も出ました。

日本の労働組合が支援する、資金の豊富な類似施設が歩いてすぐの所にできたことから、子どもたちが流失し、活動の停滞が見られるヴィエンチャンの「子ども文化センター」については、しばらく本会の事務所に移転し、新たな展開を計ろうとの意見が大勢を占めました。いずれにしても、「どんな子どもでも参加できる活動」というわれわれの考えをよりねばり強く、現地に伝えていくことになりました。

生活の中で様々な楽しさを感じることができ、自分を表現していくことができる、ということは子どもの成長の中でとても大切なことです。それを実感できる場として「子ども文化センター」は貴重な施設であることは間違いありません。来年はルアンパバンにも新しい「子ども文化センター」が設立されます。

このように、プロジェクトを検討して行くと、もう少しなんとかせねば、頑張らねば、という話になっても、間違っている、もっと縮小しようという話にはなかなかありません。優先順位をはっきりさせられたという程度です。内心、各自の負担を軽くしたいと思っていますのですが、どうもその方向に結論は向いてくれません。

■プロジェクト貧乏になっている現状

一方、会の活動を支える収入をみると、この3年間、予算規模が大きくなってきた多くの要因は、郵政省ボランティア貯金からの配分など、大口のプロジェクト指定寄付が大幅に拡大した結果で、個人の方を中心とする一般寄付はそれほど大きくは伸びていないことが明らかになりました。

プロジェクト指定寄付は、政府系、あるいは財団などからのご支援によるものですが、一般にソフト（例えば人材育成のためのセミナーなど）のための費用は、ハード（建物建設など）のためのものより、申請が通りにくい傾向があります。また、東京事務所の経費などが普通認められず、その結果、プロジェクト拡大に伴う事務量、経費の増加分は、限られた一般寄付金で

まかなうことが必要となってしまいます。さらに、外務省NGO支援、東京都国際財団などのからのご支援は、半額自己負担、それも事業が完了してからの支払いということで、自己資金をかなり準備しておく必要があります。そのため以前は出版費用や、そのときどきの判断で臨機応変に対応できた経済的な余裕が無くなってきています。

プロジェクト寄付の増加は、事務量の飛躍的な増加をもたらしました。当然といえば当然ですが、ご寄付をいただくためには、しっかりした申請書を作成せねばなりません（大体年に10通ほどの申請書を、一通につき2～3週間かけて書きます）。また、プロジェクト運営のチェックはもちろん、最終的には、膨大な会計処理が必要です。このための事務量が、非常に重いものとなります。日常業務の半分ぐらいがこの種の事務であると言っても言い過ぎではありません。しかし、このための人件費をはじめとする経費は、なかなか確保できません。

■事務に追われる東京事務所

現在東京事務所では、プロジェクト調整、現地連絡、入出金管理、ボランティア指導などを一人の常勤スタッフと非常勤スタッフが担当し、名簿入力、経理入力、資料送付などを数名のボランティアが担当しています。たしかに、この一年で有給スタッフが増加し、助けてくれるボランティアも増加してきました。しかし、仕事の量がそれを上回って増加しています。また、新しいボランティアに任せられる仕事には限りがあります。そのため、一人あたりの仕事量が、なかなか減少した感じになりません。そして本来ならもっと力を注ぐべきである、プロジェクト調査、評価、計画などについて十分に行うことが出来ません。

いずれにしてもボランティアにとって、何らかの楽しみを持ちながら、活動に参加できるように、考えて行かねばならないことは明らかです。

■ヴィエンチャン事務所とのコミュニケーション

ヴィエンチャン事務所をどのように位置づけるかということも話し合われました。昨年度まで、現地の責任者であったパダペットが留学研修のため、非常勤となったのですが、適当な後任者がなかなか見つからないのです。会はこの3年間、日本から常駐スタッフを派遣せずに運営を続けてきました。私たちはラオス事務所を、東京の指示で動くというシステムではなく、ラオス人スタッフが育つことで、徐々に自主的な判断で動ける事務所にしたいと思ってきました。その成果は、昨年度の現地での共同出版や図書販売、事務所に

付設された「子ども文庫」での活動などに現れています。しかし事務所の責任者となると、すでにキャリアがある人では、希望給与が高いなど、なかなか折り合うことが出来ません。そこで、会としては若い人材を雇用し、育てていくことで運営を行おうとの合意が出来ました。このスタッフ探しの過程で、ラオスの人材の薄さを実感すると共に、「人を育てる」ことの重要性を改めて実感しました。

さらに、話し合いのなかで、会の意志決定システムが明確でないというクレームでもありました。会代表、事務局が東京事務所に常勤しておらず、月2回程度の定例会議ではなかなか十分な話し合いとなりません。また決定が持ち回りとなることにより、決定まで時間がかかる、プロセスが明確でないなどの弊害も生じています。

この結果、ヴィエンチャン事務所スタッフにもイライラが募る原因となっています。

しかし、会は、片手間ボランティアということを標榜しているように、基本的には、それぞれ本業の仕事を持っている人、学生などによって活動は担われています。そのための起こる非完璧さ、非効率さもある程度は受け入れるべきかもしれません。

この辺りのバランスをどこで受け入れ、我慢するのか、実際にはなかなか難しい問題です。

■活動を、どう評価すべきか

活動の評価を行うときに、これまで会は50種類23万冊の本を出版した、720の移動図書箱、図書袋を作った、19校の学校図書室を整備開設...など数を挙げて、成果を誇る？ことが出来ます。こんなに小さな会なのに良くできたものだ、との若干の感慨とともにです。しかし、われわれにむしろそれよりも、違う成果の測り方が気になってきています。われわれの活動は「ラオスの子どもたちに種を撒いたのであろうか?」「実を結んでいるのであろうか?」。外国人として何かをしてきたという成果と、受け手であるラオスの人々にとっての意味とは異なっているに違いないのです。教育分野での支援は、成果がとても見えにくいものです。何年後にじわっと感じられる種類のこのようです。そうすると、それではわれわれは、どこまで、いつまでこの活動を続けるのでしょうか? 簡単には答が出ません。

■さて、これからどうする

話し合いの中で、一つ何となく皆が合意したのは、少なくとも後3年、西暦2000年一杯までは、会をこの形態で続けて行こうということです。3年ということ

に特に意味はありませんが、時間を切った目標設定を行うことにより、活動の明確化を行いたいと考えたのです。会は企業と違います。ましてNGOは永続的な存在である必要はありません。

その間、会で行う活動の方向は、文字文化をより啓発して行くために「人」を育てること、その一環として、出版社や書店の経営を視野に入れ、準備をすること。そしてそれらの活動がラオスの人々を巻き込んで行われるように考えること。

さらに、子どもたちが日々の生活の中で、「楽しさ」を感じる機会を提供する活動を続けること、などに絞り込み、これ以上プロジェクトを広げることはやめようという合意です。

■共同プロジェクトで活動の生き残りを

そのためには、自分たちで全部やろうと考えないで、ネットワークによる協同を積極的に考えていくことが不可欠であると考えに至りました。例えば、これまで絵本づくりセミナー、図画工作セミナー、紙芝居セミナー、身体表現教室など、いろいろな分野の専門家の方にお願ひし、現地で教育関係者や子ども達にセミナーをしていただきました。これを、もっと専門家の方々の主体と責任を強くした、専門家グループと会との共同プロジェクトに変えていけないでしょうか。

今年の夏、ヴィエンチャンの子ども文化センターで、子ども達に様々な遊びを体験させてくれたボランティアの保母さんがいました。この方のように、専門性の強い方々(グループ)と共同して継続的なプロジェクトを進めていくことにより、活動の質を高め、より多くの方が参加するNGOへと変身していける可能性があるように思えるのです。

同じ視点から、この通信を読んで下さっている、たくさんの方が、自らボランティアとして、まさにラオスの子ども達の教育環境の改善プロジェクトに、私たち活動ボランティアと共同して参加していると実感できる運営、コミュニケーションづくりが必要だと感じています。それにより、会がもっと積極的なNGOに発展していけるのだと思います。

結局9月15日の会議は、時間切れとなり、突っ込み不足な言いつばなしの話し合いに終わってしまった感はありません。しかしこれまで述べてきたように、改めて活動の全体を見直すことにより、今後への展望も少しだけですが、見えてきました。もちろん実際にうまくいくのかはこれからですが、もっと皆さんからのアドバイスを下さい。参加して下さい。よろしくお願ひいたします。

東京事務所の動き

東京事務所は、1.5人の常勤スタッフと、本業を別に持つ4名のボランティア・スタッフ(世話人)を中心に、社会人や学生ボランティアによって運営されています。この間の動きについて報告します。定例ミーティングはどなたでも参加できますので、どうぞ、おこしください。

- 4月3日：ミーティング(世話人会)
 12日：「ラオスのこども通信 9号」発送
 13日：定例ミーティング(3月セミナー報告会)
 17日：ミーティング(世話人会)
 27日：「ピーマイ・ラオ ラオスお正月パーティ」開催<東京ガス大田支社>約100名参加
 5月10日：ラオス語講座スタート(以降毎週土曜日 全10回) 16名受講
 11日：定例ミーティング
 21日：ミーティング(世話人会)
 31日：スタディーツアー第1回顔合わせ
 6月8日：日曜勉強会(ラオスの保健衛生事情 講師 帖佐理子さん)・スタディーツアー第2回打ち合わせ
 9日：森ラオス出張(7月5日まで)
 11日：野口ラオス出張(6月18日まで)
 18日：東海市立平洲中学校生徒6名事務所来訪
 21日：スタディーツアー第3回勉強会
 24日：ミーティング(世話人会)
 25日：国際ボランティア貯金配分金交付式<大森郵便局> チャンタソン山崎出席
 7月5日：スタディーツアー第4回勉強会
 13日：定例ミーティング・ラオス語講座終了
 19日：スタディーツアー第5回勉強会
 22日：板橋区立志村第3中学校生徒3名事務所来訪
 28日：大田区国際交流団体懇談会 山崎出席
 8月1日：スタディーツアー出発(10日まで) 19名参加 森チャンタソン同行
 8日：ボランティア島中さん「ヴィエンチャン子ども文化センター」にて活動(8月30日まで)
 9日：「1997国際協力フェスタin上越」野口講演<上越青年会議所>
 19日：ミーティング(世話人会)
 26日：ミーティング(世話人会)
 9月5日：ミーティング(世話人会)
 14日：日曜勉強会(日本とインドシナ 講師 越田稜さん)・定例ミーティング(島中さん活動報告)
 15日：ミーティング(会の今後について)・スタディーツアー報告会
 25日：鳩ヶ谷市立鳩ヶ谷中学校生徒4名事務所来訪・ミーティング(世話人会)
 30日：国際ボランティア貯金NGO懇談会 赤井出席
 10月4,5日：国際協力フェスティバル<日比谷公園>
 10日：東京郵政局「国際ボランティアフェスティバル」島中参加

- 12日：日曜勉強会(ドリアンドウアンさん)・定例ミーティング
 23日：「掛川市国際協力講演会」野口講演<掛川郵便局>
 25,26日：OTAふれあいフェスタ<平和島>
 30日：JANIC10周年記念パーティ 出席
 [写真パネル貸出]
 上越青年会議所 下関市立垢田中学校 掛川郵便局
 田園調布郵便局 板橋区立志村第3中学校 東京女学館

INFORMATION

この通信を多くの方々に読んでいただきたいと思います。お読みになりましたら、ご興味のある方にお返し下さい。また、知人友人に通信をお渡しいただける方、ご連絡下さい。通信をこちらから送付させていただきます。

また逆に、経費を少しでも無駄にしないために、今後通信送付不要の方は、お手数ですが、会事務局までご連絡下さい。(この通信を送るのに1通あたり約200円ほどかかります。)

◆アルバイト募集◆

東京事務所での事務作業(電話対応、パソコン入力、郵便発送、伝票整理など)週2日以上(平日昼間)3月まで継続勤務可能な方(4月以降継続可)詳細については事務所までお問い合わせ下さい

◆ボランティア募集◆

●東京事務所 活動ボランティア

各種活動参加、事務補助など東京での活動を定期的に支えて下さる方

●現地事務所 活動ボランティア

子どもの情操教育(音楽・絵画など)に関する専門家の方で、1ヶ月以上の長期間現地に滞在して活動して下さる方いませんか?夏休みなどを利用してもかまいません。ご連絡下さい。

寄付者・協力者の方々

どうも、ありがとうございました

1997年3月(23件)

李宣怡 飯塚真 市村倭子 出雲市今市慶人会婦人部 井上久子 上野浩道 大泉アイ 柏中学校・嶋根・前野 加藤信子 我那覇頭 佐藤登志子 柴崎陽子 杉浦利彦 竹園東小学校 玉川中学校生徒会 津幡小学校 利根川三男 新見宏 林かほる 富木島中学校 吹野とし 山之内美佐子